

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00205

研究課題名（和文）中世イタリアの宗教画における周縁と境界：画像と観者を結ぶ媒介機能に着目して

研究課題名（英文）Periphery and Border in Medieval Italian Religious Paintings: Focusing on the Mediating Function between Image and Viewer

研究代表者

松原 知生 (Matsubara, Tomoo)

西南学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：20412546

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：中世イタリアの宗教画の下端に描き込まれた細部、および境界領域を形成する枠装飾に着目しながら、それらが作品と観者をどのように結びつけていたのかを明らかにした。画中人物の足先や靴、衣の襷や縁、玉座の基部や足載せ台、画中の聖者に捧げられた供物（花瓶や蠟燭など）、施主の像などの細部に注目し、それらが画面内部のどこに位置づけられているか、枠装飾部分といかなる位置関係にあるか、画面外部の観者や設置のコンテキストとどのように関わっているか、などの観点から分析を行った。これにより、画家たちが観者の視覚や触覚にいかにかアピールし、注意を画面内部に向かわせ、天上世界へと媒介しようとしていたのかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の美術史学における絵画研究では、画面の中央部に大きく描かれた主要人物の表情や身振りが考察の中心となっていたが、本研究では、宗教画の下方や周縁部、すなわち絵を前にした礼拝者の眼に最も近い位置に場を占める、一見とるに足りない細部やモチーフにあえて注目した。それらが観者の視覚や触覚にどのように働きかけていたか、あるいはその表現が設置空間の諸条件にいかにか規定されていたかを推測することで、これまでの美術史学においてやや分断されていた、作品（絵画テキスト）そのものという内的要素の分析と、その受容環境（コンテキスト）という外的要素の考察を、相互に連動させつつ展開することが可能となった。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the details painted on the lower edges of medieval Italian religious paintings and the frame decoration that formed the boundary area, and clarifies how they connected the works to the viewer. The artists paid attention to details such as the toes and shoes of the figures in the painting, the folds and edges of the robe, the base of the throne and the footstool, the offerings to the saints in the painting (vases, candles, etc.), and the images of the donors. I analyzed them in terms of where they are positioned inside their compositions and in relation to the decorative parts of the frame, and how they relate to the context of the viewer and the installation inside the churches. Through this analysis, I examined how the painters tried to appeal to the viewer's visual and tactile senses, directing their attention to the interior of the painting and mediating them to the heavenly world.

研究分野：美術史学

キーワード：西洋美術史 中世美術 ゴシック イタリア絵画 ジョット チマブーエ ドゥッチョ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

イタリアにおける従来の中世絵画研究では、作品の表現様式を分析し、作者帰属や年代設定を議論するという、伝統的な様式論的方法が支配的であった。他方、英語圏や他のヨーロッパ諸国においては、作品が制作され受容された歴史的背景に着目する社会史的考察やコンテクスト分析が、しばしば試みられている。だが、様式論に立脚する絵画のテクスト的分析と、作品を取り巻く歴史背景に着目するコンテクスト的分析は、現在においてもやや乖離し、十分に連動しているとはいえない。したがって本研究では、これまで十分に考慮されてこなかった周縁的な画中要素が、観者とその受容環境にいかに関与していたのかを問うことで、両者を適切かつ緊密に結びつける分析方法を模索することを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究は、中世イタリア、とりわけトスカーナ地方で活躍した画家たちによる宗教画に、従来とは異なる角度から光をあてることを目的とした。すなわち、画面の周辺部分や境界領域に配置された細部やモチーフ群を分析することで、それらが観者の視覚や触覚にどのように作用していたのかを解明することを試みた。具体的な考察対象としては、13世紀から14世紀初頭にかけて制作された「玉座の聖母子」の大型テンペラ板絵(ドゥッチョ作《ルチェッライの聖母》、チマブーエ作《サンタ・トリニタの聖母》、ジョット作《オンニッサンティの聖母》)、ジョットと工房によるフレスコ連作(パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂、アッシジ、サン・フランチェスコ聖堂下院のサン・ニコラ礼拝堂やマッドレーナ礼拝堂)を中心にとり上げた。

### 3. 研究の方法

中世イタリアの宗教画における中心的な対象、すなわち画面中央を占める聖なる人物群の表情や身振りだけではなく、画面下端や壁面周辺に描きこまれた細部や、境界領域を形成するモチーフ群に着目しながら、それらが作品と観者、絵画テクストとコンテクストをどのように結びつけていたのかを明らかにした。

周縁的な細部としては、画中人物の足先や靴、画中人物のまとう衣の襷や縁、画中人物が腰かける玉座の基部や足載せ台、画中人物への供物(花瓶や蠟燭など)、施主の像などが挙げられる。他方、絵画空間の境界をなすモチーフとしては、絵画を枠づける境界線(玉座の基部や足載せ台の最下端、床の最前面、銘文が記入される帯状の線など)、銘文(署名と年記を含む)、トロンプ・ルイユ(錯視表現)による枠や建築表現などが、とりわけ重要となる。

これらの細部やモチーフ群について、画面内部のどこに位置づけられているか、相互にどのような関係にあるか(隣接、接触、重なり合いなど)、画面外部の観者や設置のコンテクストとどのように関わっているか、などの観点から分析を行なった。これにより、画家たちが観者の視覚や触覚にいかに関与し、注意を画面内部に向けようとしていたのかを考察した。

さらに、これらの絵画モチーフを、聖ボナヴェントゥーラの神秘思想や、大理石の紋様の生成をめぐるアルベルトゥス・マグヌスらの学説などと関連づけることで、絵画による観者への働きかけが同時代の神学的・哲学的議論と照応関係にあった可能性についても指摘した。

### 4. 研究成果

中世イタリア絵画を代表するテンペラ板絵3点とフレスコ壁画3点について新たな解釈を提示することで、当時の画家たちがさまざまな工夫によって観者の感覚に訴え、地上の礼拝者を聖なる天上世界へと媒介しようとしていることを個別具体的に明らかにした。今後は、本研究で十分に論究できなかったシエナ大聖堂の祭壇画連作などについても、今回得られた成果を活かして考察の幅を広げていきたい。6作品についての解釈の概要は以下のとおり。

#### (1)テンペラ板絵についての新解釈

ドゥッチョ《ルチェッライの聖母》(フィレンツェ、ウフィツィ美術館)

元来の設置状況に関する従来の研究史を振り返って論点を批判的に整理するとともに、聖母マリアが身につけるマントの衣襷の縁と靴のつま先の描写、およびそれと組み合わせられた玉座の脚乗せ台の立体表現を分析することにより、本図が礼拝空間において信者たちの視覚のみならず触覚をも強く刺激していた可能性について考察した。

チマブーエ《サンタ・トリニタの聖母》(同上)

本図には、玉座の基台部に3つの半円アーチが大きく開き、そこに4人の旧約の預言者が居並ぶという、従来にはない奇抜な表現が見出される。このモチーフを、マントが開かれて露わになった聖母マリアの腹部というやはり例外的な図像、および預言者たちが手にする巻物の銘文の内容と関連づけて考察することで、本図がイエスの受肉の場となったマリアの母胎の「開かれ」を主題化していることを明らかにした。

ジョット《オンニッサンティの聖母》(同上)

元来オンニッサンティ聖堂に設置されていたこの作品を、同じ教会のために制作された他のジョット作品と結びつけて分析することで、本図が受肉の場としてのマリアの母胎への接近可

能性を視覚化している可能性を指摘した。また、玉座の基台部と舗床が3段の階層構造を有していることに着目し、アンモナイトの化石(当時はおそらく蛇に類似した石と認識されていた)が埋まった白大理石製の最下段の床が「死」の領域を、聖者たちが居並ぶ最上段が永遠の「生」およびイデア的な「形相」の領域をそれぞれ形成していること、そして、その中間に位置する不定形の斑入り色大理石製の突出部分が、「死」から「再生」へと至る移行空間を形成するとともに、いまだ「形相」をもたぬ純粋な「質料」の領域をなしてものを論じた。

## (2) フレスコ壁画についての新解釈

### ジョット、スクロヴェーニ礼拝堂壁画(パドヴァ)

内陣壁面下方に迫真的なトロンプ・ルイユ(錯視表現)で描かれた一対の空洞、いわゆる「小聖歌隊席 (coretti)」について考察を行なった。この部分が当時としては稀なイリュージョン効果を生み出していることについては、従来の研究においても認識されてきたが、様式論・図像学的な観点からの評価が主であり、その宗教的な意義や機能については踏み込んだ議論はなされてこなかった。先行研究の読解を通じてその問題点を整理し再検討した上で、この空洞イメージが壁画の他の部分(特に上方に配された板絵や物語画)と有機的に連動することによって、天上の恩寵を地上の観者へともたらす効果を生み出しているという仮説を提示した。

### ジョットと工房、サン・フランチェスコ聖堂下院マッダレーナ礼拝堂壁画(アッシジ)

同礼拝堂に描かれたマグダラのマリア伝について、観者に近い低い位置に描かれた注文主テオバルド・ポンターノの二重肖像に着目しながら分析を行なった。右壁面では、跪いてマグダラのマリアの手に触れるポンターノの上方に《ノリ・メ・タンゲレ(我に触れるな)》と《天使によって天へと揚げられるマグダラのマリア》が描かれている。このような3段階による天への上昇プロセスは、フランチェスコ会神学を代表する聖ポナヴェントウラの神秘主義的著作(とりわけ『三様の道』と『魂の神への道程』)に認められる、新プラトン主義的な神との合一化の過程と重なり合うものであり、右壁面では私的な祈りに没頭する修道士としての「観想的生(vita contemplativa)」が主題化されていることが分かる。これに対し左壁面では、アッシジの初代司教ルフィヌスに頭部を触れられるポンターノの上方に、《パリサイ人の家での回心》や《マグダラのマリアの最後の 聖体拝領》など、告解や聖体の秘跡を連想させる場面が位置づけられている。ポンターノがフランチェスコ会修道士であると同時にアッシジ司教でもあり、司牧に従事する立場であったことを考えると、左壁面では、公的な秘跡を信者たちに奨励する司教としての「行動的生(vita activa)」が図像化されているといえる。このように、左右両壁面において「観想的生」と「行動的生」がそれぞれテーマ化された背景には、いずれかの生き方を偏重することなく双方のバランスをとる、「混合的生(vita mixta)」という第3の生き方を、注文主ポンターノが理想としたためであると結論づけた。

### ジョットと「サン・ニコラ礼拝堂の画家」、サン・フランチェスコ聖堂下院サン・ニコラ礼拝堂装飾(アッシジ)

同礼拝堂に設置されたジャン・ガエターノ・オルシーニ枢機卿墓碑について考察を行なった。この墓碑の特異性は以下の2点に存する。第一に、大理石彫刻による墓碑本体の上部に、フレスコ画による聖母子と聖人像、およびステンドグラスによる被葬者と寄進者の像が配され、いわば間メディアム的な複合体を形成している点。そして第二に、フレスコ画による聖母像が観者の方を見つめ、しかもその周囲の枠=額縁が、いわゆる「擬似祭壇画」とも、あるいは窓の向こうに顕れた聖なる幻視とも見紛うようなトロンプ・ルイユで描かれることで、両義的な視覚効果を観者に及ぼしている点である。これら2つの特異性の意義を明らかにするために、まず13世紀半ばより発展をみた、彫刻と絵画(またはモザイク)を併用した新しいタイプの墓碑装飾、およびそれと並行して成立した「魂の推挙(commendatio animae)」図像の流れをたどり、その中に本作品を位置づけることで、2つの異質性(ステンドグラスが隣接していること、「魂の推挙」図像に不可欠な跪拝する被葬者の像が不在であること)を指摘した。さらに、こうした例外性の理由を考えるために、同時代の死生観をめぐる新しい思想と実践(煉獄の観念の成立、遺骸の前での死者ミサの実施、個別的審判をめぐる論争など)と関連づけて解釈することで、本作品が観者=礼拝者に至福直観を疑似体験させ、死者のための代祷を促す媒介装置としても機能していたという仮説に至った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松原知生	4. 巻 49
2. 論文標題 メタメディウムのアイコンとしてのジョット作《オンニッサンティの聖母》	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松原知生	4. 巻 37(1)
2. 論文標題 至福直観の媒介装置としての墓碑 アッシジ下院サン・ニコラ礼拝堂 ジャン・ガエターノ・オルシーニ枢機卿墓碑再考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西南学院大学国際文化論集	6. 最初と最後の頁 13-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原知生	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 「混合的生」への回路：ジョットと工房によるアッシジ下院 マッドレーナ礼拝堂のフレスコ連作をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西南学院大学国際文化論集	6. 最初と最後の頁 13-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原知生	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 恩寵の出入口：ジョットのスクロヴェーニ礼拝堂壁画における2つの空洞イメージ試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学国際文化論集	6. 最初と最後の頁 95-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松原知生、西山萌	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 ヴィクトル・I・ストイキツァ『シャーロック・ホームズ効果：まなざしの変奏 マネからヒッチコックへ』第1章「桎梏」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西南学院大学国際文化論集	6. 最初と最後の頁 129-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松原知生
2. 発表標題 浸食と決壊：中世イタリア絵画における流動体としての大理石イメージ
3. 学会等名 第76回美術史学会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松原知生
2. 発表標題 近代メディアと古物のメディアム：日本近代骨董文化論序説
3. 学会等名 2023年度日本近代文学会秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 松原知生	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 652
3. 書名 転生するアイコン	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------